

平成24年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ

今年の新潟インターハイでは、東京都の男子は2種目に優勝し、入賞は8種目としました。また、東京都高校新記録も3種目樹立するなど健闘しました。来年度の大分インターハイ・東京国体を目指し今大会、そして山梨県での関東新人大会がその前哨戦となります。来年を担う1・2年生の頑張りにご声援を・・・。

10月27・28日に山梨県で行われる関東新人大会出場を目指す本大会の展望をお楽しみください。

男子

・短距離

100mでは、今シーズン東京都ランキングトップの内田 貴一（暁星2）がケガで欠場し「混戦模様」である。その中で、間中 太亮（日大豊山1）と林 謙太郎（八王子2）が支部予選で10秒台をマークし中心となるだろう。小妻 洋輝（東農大1）、榎本 大樹（明星2）、鮫島 卓臣（青山学院2）も同等の実力を持ち「誰が勝つか？」はわからない。準決勝からの混戦を勝ち抜けるのは誰だ？

200mも100m同様だが、これに400m組が加わり更に「激戦」となりそうだ。大澤 裕輝（八王子2）
坪 祐貴（八王子1）が林と共に八王子高校での上位独占を目指してくるだろう。

400mでは、新潟インターハイでマイルリレーを争った八王子高校の坪・大澤と東京高校の池田 亮平（2）が優勝を再度争う事は間違いないだろう。支部予選で49秒39と一気に自己記録を伸ばしてきた池田が一歩リードしていると言える。48秒台前半での優勝を期待したい。

・中長距離

新潟インターハイで三武 潤（城西3）が優勝し、白石 浩之（立教池袋3）が4位と健闘した800m。都総体でも予選からハイレベルのレースが続出し、今年の800mは全国最高レベルであった。この新人大会に出場する選手で1分55秒を大きく切った選手はいないが、三武の後輩である戸澤 文也（城西2）を中心としレースが進むだろう。しかし、織田 修平（保善2）、山田 陽平（都文京1）、手塚 光貴（日大豊山1）ら有力選手も多数いるだけに、都総体同様予選から積極的なレースをして好タイムを期待したい。

1500mと5000mでは、有力選手が多かった3年生が抜けて「混戦必至」な2種目である。さらに、東京都駅伝が間近に迫っており駅伝メンバーとなる1・2年生選手の出場を控えた学校も少なくない事からレベルの低下に繋がらないか心配でもある。そんな中で、支部予選を勝ち抜きこの大会で優勝を狙えそうなのは、久我山の竹下 直宏（1）、曲直瀬 生（2）、宇野 幹也（2）、早実の岡田 佳之（2）、拓大1の茂木 圭次郎（2）、南多摩の福元 翔輝（2）、大東1の大橋 直矢（2）になるのではないだろうか？特に茂木・福元には1500mで4分を切る積極的なレースを、そして5000mでは出場者全員に、夏の鍛錬の成果を発揮し、駅伝シーズンへと弾みのつく好走ができることを全選手に期待したい。

3000mSCは、夏目 享（拓大1）、浅見 眞之（大東1）が先頭に立ちレースを牽引しそうだ。しかし、走力次第では上位に食い込むことが可能になるので最後まであきらめずに粘り強く走り切りたいところだ。

・ハードル

110mHは、新潟インターハイで準決勝まで進出した坂本 景（東京2）が出場唯一14秒台の記録を持ち、かつ実績も最上位であろう。自己記録は14秒71だが風力などの条件次第では14秒台前半が出てもおかしくない。同僚の前田 洋志（東京2）、向井 頌之（開成2）、小田島 義則（都芦花2）、荒井 駿哉（立教池袋1）、栗城アンソニータイレル（八王子1）が関東新人出場を狙っている。

400mHは、110mHの坂本が支部新人で54秒台をマークし一歩抜け出している。まだ、経験が少ないだけに逆脚での踏切に不安がある。坂本と同じく54秒台の記録を持つ向井との「一騎討ち」となりそうだ。二人を追うのは中野 秀俊（桐朋2）、浜中 康行（学習院2）であるが、関東新人出場のためには前半からの積極的な走りが必要とされる。

・競歩

5000m競歩では、南関東大会に出場している川上 勇一郎（明大中野2）が実力NO1と言えるところだが、この支部新人で初挑戦ながら23分22秒26という好記録をマークした山口 壱平（東京実業2）が一躍優勝候補にのし上がってきた。元々中長距離の選手であっただけにスタミナにも問題なく、かつ伸びやかな歩型は将来性の豊かさを大いに感じさせる。あとは経験だろう。今後のレース経験を来年の大分インターハイに繋げてもらいたい。

・跳躍

走高跳では、今大会に出場する選手で2mを越えている者はまだいない。自己記録から見ると1m97の寺内友也（東京2）が都総体でも2位となっているだけにリードしていると言える。これに、加藤 舜（都東大和2）、八田 隆純（東京1）、横戸 寛之（堀越2）が迫るだろう。いずれにしても、2m以上にバーをかけられるよう期待したい。また、入賞ラインは1m88か1m91と予想される。

棒高跳は、今年東京都からインターハイに出場できなかった種目である。その中で、1年生ながら南関東大会で4m50を跳んだ田代 丈（東京）がリードしている。田代に対して2年生の渡邊 淳之（都日比谷）、秋山 優（都竹早）、高橋 大貴（堀越）の3名が4mを越える自己記録を保持している。

いずれも高い能力を備えているが練習や試合の機会が少なくそれを発揮しきれていないだけなので、多くの跳躍練習と試合経験により記録を高めてもらいたい。

走幅跳は、岐阜国体少年男子Bで出場する間中 太亮（日大豊山1）と昨年の山口国体入賞の内川 佳祐（東京2）がともに今年のインターハイに出場している。間中は100mでも本大会の優勝候補になるだけのスプリント能力があり安定した記録を連続している。内川は卓越した跳躍技術を持ち7m23の自己記録を保持しており、各大会にも確実に7m以上の記録をマークしている。この両者の「一騎打ち」になると予想される。前田 淳（早稲田実業2）、井関 慶人（東京1）、斉藤 拓海（八王子2）にも7mを狙うチャンスがあるだろう。

三段跳びでは、インターハイで決勝に進出し14m83の記録を持つ東京の内川が断トツだ。故障等のない限り優勝は揺るがない。しかし、走幅跳と同じく斉藤・井関、そして西原 大二郎（岩倉2）あたりが14m越えを目指したいところだ。

・投擲

砲丸投・円盤投とも東京高校の安藤 夢が1年生ながら優勝しそうだ。砲丸はすでにインターハイ決勝進出に近い15m07をマークしており、この後の国体にも少年男子Bに出場予定でかつ優勝候補の一人だ。円盤でも40mに迫るところまで自己記録を伸ばしており2冠は固いだろう。円盤では同じ東京の栗城 湧介（2）が40mを越える可能性があるのが安藤と競り合う可能性もあるだろう。この両種目では記録低下の可能性があるので出場選手の奮起に期待したい。

ハンマー投げでは、1・2年生で50mを越える記録を保持している選手はまだいない。南関東大会にも出場した三浦 悠太・石垣 俊典・南 陽介の保善高校トリオと戸山 和紀（穎明館2）が45m以上投げることが出来る力があり50m突破を目指している。40mあたりが入賞ラインとなるだろう。

やり投げは、都総体8位で唯一入賞している榊原 芳章（東京成徳2）が支部予選で56m90にまで成長した。優勝の確率は非常に高いだろう。砲丸・円盤の安藤もこの夏からやりを始め、すでに53mを越えており勢いもあるだけに3種目制覇の可能性もある。岸 俊介（日大豊山2）、岩本 耕平（都日野2）も上位入賞候補だろう。しかし、全国大会では60m以上が求められるだけに大きく自己記録を更新してもらいたい。

・リレー

両リレーもと、八王子・東京・日大豊山・城西の4校が競り合うことだろう。その中で、インターハイを経験した1・2年生が多い八王子がややリードしているだろう。しかし、バトンパスやリレーに賭ける思いで勝敗が決まると思われるだけに「チーム力」で差ができるだろう。東京都のリレーは今年のインターハイで活躍しました。それも都内でのライバル意識がそれを育てたと思います。出場全てのチームにチャンスはあります。

平成24年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ

今年のインターハイで、東京都の女子は男子同様2種目に優勝し8種目に入賞した。昨年は8位入賞が一つだけだっただけに、まさに「大躍進」と言える。東京都高校新記録も5つ樹立した。特に1・2年生が活躍した。その選手たちが今大会で活躍する姿をトラック・フィールドともに数多く見られます。来年を担う1・2年生の頑張りにご声援を・・・。

そして、今年の大会では東京高校と白梅学園との総合優勝争いが白熱しそうだ。両校ともレベルの高い選手が揃い競り合うことで好記録誕生の可能性も高くなるだろう。こちらも期待したい。

女子

・短距離

支部予選の記録では、風などの条件的に比較はしがたいが、やはり実力的にはインターハイ5位で11秒90の記録を持つ高森 真帆（東京2）が優勝候補だろう。しかし、同じく11秒台の記録を持つ利藤 野乃花（白梅学園2）が伸びやかな走りに対抗すると思われる。鈴木 夢桜（東京2）も優勝したインターハイのリレーでは第一走者として素晴らしい走りをした。腰痛を抱えてはいるが切れ味鋭いスタートから11秒台を目指したいところだ。また、村上 ちはる（白梅学園1）も急成長してきた。次代を担うスプリンターとなることは間違いない。インターハイ組を追いかけるのは山子 真里奈（錦城2）、宇都宮 礼慈・本多 真理子の江戸川女子の2年生コンビたちであろう。

200mも100m同様だが、この種目でインターハイ出場の寺田 梨紗（城西2）や400mHで実績の高い高島 紗矢子（都狛江2）がこの夏で一層の力をつけていれば高森・利藤と並び立つことだろう。

400mは、岐阜国体で新潟インターハイのリベンジを期している利藤 野乃花（白梅学園2）が東京都高校新記録を狙うだろう。今年55秒台前半にまで記録を伸ばしてきたので、ここで一気に54秒台に突入したいところだ。同じ白梅学園の香坂 さゆり（2）・村上がともに57秒台をマークしており上位を独占しそうだ。だが、支部予選で57秒45をマークした北村 夢（東京2）がそれを阻止していくだろう。また、高島や寺田もスピード能力の高い選手であり上位に顔を出す可能性もある。

中長距離

800m・1500m・3000mと3種目にエントリーし、1500mで東京都高校新記録をマークしているト部 蘭（白梅学園2）と3000m・5000mで東京都高校新記録をマークした谷萩 史歩（八王子2）とのレベルの高い戦いとなるだろう。これまで、これほどの好選手が都内で激突することはなかっただけに好レースが展開されると予想され今から楽しみである。800mでは、北村 夢（東京2）と鈴木 菜沙（白梅学園1）が2分13秒台の記録を持ちト部とのハイレベルのレースが期待できそうだ。1500m・3000mでは全国駅伝常連の順天高校が出場しておらず入賞争いは混沌としそうだ。その中、佐藤 由依（都南多摩2）、元廣 由美（八王子1）、唐澤 ゆり（都上水2）も上位に顔を出すことだろう。

・ハードル

100mHでは、七種競技で新潟インターハイ優勝の伊藤 明子（田園調布学園2）が優勝候補の一番手であろう。同じく2位の澤田 珠里（白梅学園1）も14秒台前半の力があり伊藤と競り合うだろう。大会新記録の期待もできるのでは？柳澤 萌香（都片倉1）、速水 舞（都駒場1）も今年南関東に出場しており14秒台をマークしたいところだ。

400mHでも伊藤 明子が1分01秒台をマークしているだけに優勝は揺るぎないものとなるだろう。記録更新も期待され、1分の壁を破ることも十分考えられ「東京都高校新記録」がアナウンスされるかも知れない。高島 紗矢子（都狛江2）、柳下 美佐子（戸板女）、香坂 さゆり（白梅学園2）もハードリング・走力とも能力が高く好記録が期待できそうだ。

・競歩

今大会17名の出場と俄然出場者が増えた。30分の壁を一人でも多く破って欲しい。今年は、吉田 百見（都文京2）が南関東大会でも健闘し今大会では26分台を目指すレースとなろう。歩型・スタミナともに優位である事から優勝候補である。吉田を追うのは若杉 遥夏（東京2）であるが、序盤で離されるようだと勝負にはならないだけにできるだけついて行きたいところだ。

・跳躍

走高跳では、今年1m70を越えている伊藤 明子（田園調布学園2）が優勝候補だ。シーズン序盤に助走が安定せずインターハイは出場できなかったが七種競技での活躍から安定感も増したことだろう。両ハードルとの3冠も大いに可能性がある。他には、渡辺 しずか（日出2）、竹内 梨子（都つばさ総合2）、佐藤 佑香（東京1）が1m60以上の記録を持ち安定していることから上位を争うことだろう。

走幅跳では、岐阜国体に少年女子Bで出場する水口 怜（白梅学園1）が自己記録5m70を持ち断然優位である。また、林 小百合（八王子2）もインターハイに出場し、ことらも5m70を持っているだけに譲れないところだ。両者とも6月以降の故障も癒え万全での跳躍となれば好記録が期待できる。また、鈴木 利佳（駒大高2）、本多 真理子（江戸川女2）にも実力があるので優勝のチャンスもあるだろう。

三段跳は今年24名のエントリーで行われる。いまだ11mを超える選手はいないが10m後半を跳躍しないと上位入賞はないだろう。そのチャンスがあるのが川村 香月（東京1）、多岐川 歩美（都北園2）、小林 優里（江戸川女1）あたりだ。だが、出場者全員があまり経験していないだけに予想するのは難しい。大幅に自己記録を更新する者が多くなることを期待する。

・投擲

砲丸投では、長沼 瞳（郁文館2）と晴山 江梨花（東京2）の対決となるだろう。南関東とインターハイでは晴山が勝ってきたが、ここにきて長沼が復調してきた。2人の投げ合いから13mを越え「大会新記録」を期待したい。11mを越えているのが森田 栞（東京2）、藤森 夏美（都つばさ総合2）で関東新人出場を争いそう。10m後半が入賞ラインか？

円盤投では、インターハイに出場した吉田 佳菜（専大附2）が優位だが夏以降記録を伸ばせていない。その中、藤森 夏美、森田 栞、清水 なつみ（日体桜華2）が同等に成長してきた。おそらく4人の優勝争いは最後の一投まで目が離せない事となるだろう。優勝記録が40mに近づく事を願いたい。

やり投げは、今年の都総体で1年生ながら40mを越え優勝した澤田 珠里（白梅学園1）がこの支部新人でも40mを越え断然優位である。しかし、「何が起こるかかわからない」のがこの種目。石井 崇愛（都つばさ総合2）、長嶋 梢（日大豊山女2）、後藤 紗希（東京1）、森田 栞らにもチャンスがあるだろう。いかに「自分のリズム」を守れるかがカギだろう。

・リレー

女子の両リレーは、東京高校と白梅学園の激突となるだろう。両校ともインターハイを経験し、かつ主軸となる選手が複数おり、来年も全国優勝を目標とするような好記録が誕生する可能性もある。総力戦となる今大会ではエースにかかる負担も大きくなるだけに、単に記録だけではなく補欠も含めた「チーム力」の差が勝敗を分ける事だろう。

優勝候補の両校を追うのは、4×100mリレーでは、八王子・江戸川女・駒大高・都つばさあたり、4×400mリレーでは、城西・八王子が関東新人出場を競い合うのではないだろうか？